

現代文学が語るもの 東野圭吾『分身』論

増 満 圭 子

要 旨

文学は時代を映す鏡である。いささか使い古された言葉ではあるが、これこそ、ひとつひとつの作品を読み終えるたびに改めて認識する概念でもある。古い文学の中に古き時代が映し出されているように、現代にあふれるさまざまな作品にも、今ある時代や社会を反映した、いくつもの切片が浮かび上がる。それらを分析することも、現代文学を味わう一つの醍醐味ともいえるだろう。今回取り上げる東野圭吾もまた、その格好の例のひとつである。東野は、『放課後』でのデビュー以来、多くのファンを得、先頃は『容疑者Xの献身』により第一三四回直木賞も受賞した。東野作品というと、読者は、そこに散りばめられたミステリのもつ謎解きの魅力に引きずられ、そのストーリーの流れに集中するが、ここには、また現代が示すさまざまな問題を、実に明確に読み取ることができる。作品に潜むのは単なる娯楽性のみではない。そうした視点から、改めて作品に映し出されている「現代」的切片を検証する。

はじめに

文学は時代を映す鏡である。いささか使い古された言葉ではあるが、これこそ、ひとつひとつの作品を読み終えるたびに改めて認識する概念でもある。かつての文学の中に当時の時代や社会の様相を数々読み

とることができるように、現代にあふれるさまざまな作品にも、それぞれ、今ある時代や社会を反映した、いくつもの切片が浮かび上がる。それらを分析することも、現代文学を味わう一つの醍醐味ともいえるだろう。今回取り上げる東野圭吾もまた、その格好の例のひとつである。

東野は、第三一回江戸川乱歩賞を受賞した『放課後』^(二)でデビュー以来、多くのファンを得、先頃は、『容疑者Xの献身』により第一三四回直木賞も受賞している。東野作品というと、読者は、そこに散りばめられたミステリーのもつ謎解きの魅力に引きずられ、そのストーリーの流れに集中しがちになるが、そこには、また現代が示すさまざまな問題^(三)を、実に明確に読み取ることができる。

東野自身、書き下ろし長編『宿命』が刊行（一九九〇年初版）されたとき、次のように語っている。「初期作品のような、殺人事件があつてトリックがあつて、犯人はこの人、というような意外性だけの作品では、物足りなくなってきました。これならいくつ書いても同じだと思ふんですね。まだ、試行錯誤の段階ですが、ミステリーではないと言われてもいいから、そういう作品は避けておりたいと思つています。」^(三)作品に潜むのは単なる娯楽性のみではない。特にこうして、作者東野自身が言いきる「ミステリーではない」領域として意識され表されているものの中に、それでは、何が見出せるか。作為の有無に関わらず、そこから表出されているものが、現代社会を一つの表象としても分析できるだろうと思われる。そうした視点から、現代文学を読み解く。

今回は、一九九三年に発表された『分身』をその一例として取り上げ、素材の一つ一つを明らかにしながら、改めて作品に映し出されている「現代」的切片を検証したい。

一 「家族」空間への回帰

「もしかしたら私は母に嫌われているんじゃないか――」

作品は、氏家鞠子のそんなつぶやきから始まる。

北海道に住むごく一般的な大学生鞠子は、幼いころから「シンデレラが継母から受けたような仕打ちを経験したわけでも」「冷たく扱われたというわけでもない」。むしろ、記憶の中では「母に愛された思い出のほうが多くを占めている」という。それでも、彼女が母に対して、常に、ある予感的齟齬を感じていた。そんな漠然とした疑いを冒頭でにじませたまま、作品は鞠子の成長を辿る。

そもそも人間の意識というものは、子供の精神形成を見ればわかるように、はじめから成熟もしていなければ、固定化した特性も備えてはいない。乳幼児期における母子を中心とした家庭環境の中で、ついで、同年齢・異年齢の友達を含む地域生活や学校生活の中で少しずつ育まれて形をなしていくものであろう。

人が生まれながらにして属するその「家族」については、心理学・社会学・文化人類学など、家族を研究する学問領域で、それぞれ、定義される内容は異なる。家族について、理論的研究を展開してきた家族社会学の立場では、森岡清美が「夫婦・親子・兄弟など、少数の近親者を主要な成員とし、成員相互の深い感情的かわりあい^(四)で結ばれた、第一次的な福祉志向の集団」と定義している。又今日では、さま

さまざまな家族形態の変化に伴い、家族をそのような社会集団の一つとして考えるより、家族心理学の観点から、長田雅喜が「夫婦を中心とし、親子、兄弟などの近親の血縁者を構成員とする、相互の愛情と信頼の絆で結ばれた小集団」、というように、「愛情」を基盤とするつながりと特徴づけることもできる。二〇〇一年大野祥子により行われた調査結果が、「血縁関係のある実の親子」「一緒に暮らしている親子」「子供がいる夫婦」「一緒に暮らしている夫婦」などの要件を高く評価していることを受けて、柏木恵子が、「親子、夫婦いずれについても法的関係や同居といった形式的物理的関係以上に、愛情という心理的情緒要因が家族たることの条件として最重要視されている」ともまとめている。そうした、愛情を基盤とするはずの家族という集団のなかで、作中、鞠子は「母」に対して、外面的には何一つ申し分のない家族・家庭であることを自覚しながらも、何か釈然としない「違和感」を感じ始める。それは、全面的に信頼していた母親への懷疑であり、自身の存在への漠然とした疑念でもあった。「母は私をさけているのではないか」という疑問を小学校五年のときに具体的な印象として抱き始めた鞠子が、やがて、「母が私の顔を見て話さなくなった」「顔はこちらを向いていても、目はいつも私以外のどこかをみていた」印象をますます深めていく。

この観念は、やがて解き明かされるミステリーの伏線の重要なひとつにかかわっていくのであるが、こうして冒頭部で語られる鞠子の印象は、「愛情に裏付けられた」家庭の中に、まっすぐに育まれたはずの

意識が、次第に、「家族」の一員メンバーである、それ自体への不安を抱き始める様相を示している。

そもそも、一般的には十二・三歳から始まる思春期は、知的にも情緒的にも自主・自立の時期である。古来エリクソンが発達段階の課題として、思春期から青年期にかけての子供について、「自己同一性の獲得時期」であると述べていたように、発達途上にある。

思春期においては、依存と独立の相克に悩み、親から心理的に独立しようとする気持ち、対立や離反を示す場合が多い。子供時代の習慣や意識から抜け出そうとするあまり、親や教師の干渉や保護を絶えがたいものと感ずるようになる。しかし、作中の鞠子の場合、その時期に、全く逆の傾向をたどっている。母に「似ていない」という漠然とした疑問を持ちつづけ、それを否定することができぬまま、彼女は、自身を、より、「親子」の枠の中へ無理にでも押し込めようと試みる。鞠子の視線に映る母は、「細かく私のことを気遣ってくれている」一見、非の打ち所のない母親像を示しているのにもかかわらず、「それが、本当に愛する娘のためを思っていることなのか」「完璧な母親とはどういうものという理想像が彼女にはあって、単にそれにもとづいて行動している結果なのか」鞠子には、釈然としない。こうした、心的状況は、思春期の若者が持つ家族への反発とは逆の不安とも捉えることができるだろう。

疑問を自らの心に封じ込め、殻を形成し、より「家族」としてのつながりを自らの周囲に見出そうとする鞠子。外部に向かって「気付か

ぬ」自分を演じつつ、その殻の内部では、押さえようのない不安に取り付かれる。それが鞠子を無理にも家族へと向かわせる。

親の関心や保護をできるだけ排除し、独立を図ろうとする時期にあつて、鞠子は、母を感じようとする。若い「個」が抱える成長に伴う自己の自覚を、改めて母との関係に置き換えて、鞠子の、家族の枠組みを問い直す作業が開始されている。これは何を意味するか。

又、鞠子と父の関係は、「大学教授をしていた父は研究熱心な人で、家にいる時でも書斎にこもって仕事をしていることのほうが多かった」「なんとなく近寄り難く、父親というよりも、管理者という目で見えていた」「私を溺愛してくれていることは自覚していた」というように、それほど、近いものではなかったらしい。だからこそ母の愛が鞠子には「常に細かく、さりげなく、しかも適切」なものだったと感じられたに違いない。

けれども、成長にしたがつて、その全幅の信頼を置いていたはずの母が、自分から遠くに行ってしまったような印象を抱き始めるにしたがつて、それをなぜか否定することができない、異様な雰囲気を感じ始めた鞠子は、その疑問を素直に母にぶつけることができない。前述のような、青年期にありがちな反抗すら引き起こす余裕もなく、母に對して「何か近づきたい危険な雰囲気」を感じる。そしてそのまま何も行動を起こさない。

こうした鞠子の、遠慮がちに家族を見つめる目、そして、その中心に位置しながらも、なぜか「母」の心に「娘」として入り込めていな

い自身を感じる意識は、母と子に通常ありうる「甘え」や馴れ合いを排除した、漠然たる他者意識とでも言うことができよう。

鞠子は、母を遠くに見ている。鞠子の家族は、鞠子にとって、完璧であればあるほどに、何か虚構的、作り上げられた家族として映っていたといえるだろう。

他方、もう一人の主人公、小林双葉。彼女は、東京で母親と二人暮らしであつて、この双葉の記憶には父の姿はまったくない。小学生のころ、母子家庭であることで、同級生に苛められ泣きながら帰った双葉に「そのくらしいの悪口は大目に見てやりなよ。みんなあんたのことが羨ましいんだからさ」「双葉は自由だからさ。チチオヤなんてものがないたらさ、何かと不自由なもんだよ。行儀よくしろとか、女の子らしくしろとかうるさくってね。ママがそんな面倒くさいことをいったことある?」「女だけってのは、一番いいんだよ。」と言いながら、双葉の顔を両手で挟み、勇気付けてくれた母、そのことが幼い記憶に残っている双葉は、父親の不在に負い目を感じることも、疑問を抱くこともなく、まっすぐに成長しているのである。しかし、あるきっかけでテレビに出ることになった双葉に、日ごろ穏やかな母が「大反対」、加えて涙を流すほどの動揺を示す。ここで双葉は、何か隠された事情を母に感ずる。双葉と母親の関係は、その日常生活の描写から、ごく一般的な、むしろ、母子二人だけの生活からくる信頼感に結びつけられた揺るぎないものと映る。が、双葉もまた、物語の進行にしたがつて鞠子と同様、母にひとつの疑問を抱いていくようになる。なぜ、母は、

自分が社会に注目されることを恐れるか。「人前に出る」ことを嫌うのか。こうして、双葉もまた、それまで完全に信頼関係に結ばれていたと信じていた母との距離を突然と感じ始めるのである。

母からの脱皮を図り始める思春期という時期に、改めて母に向かわせることで、家族のあり方を問うている。展開としては、ここから謎探しが始まっていくのだが、冒頭部のこうした家族への渴望に、まずは現代の一つの切片を見出すことができるだろう。

二人の母はやがて、二人の疑問をそのままに残しながら、鞠子の母は自殺とも思われる火事で、双葉の母はひき逃げの交通事故でそれぞれ死を迎えるが、その死が、一層、鞠子と双葉に、自己存在への疑問を色濃くさせていく。

何の不安要素もないように見えた家族を、いったんこうして娘の視点を通して崩壊させていくことで、ものがたりは静かに進行をはじめ。崩壊したかけらを果たして彼女たちはどうつながぎあわせていくとするか。家族の何を理解しようとするのか。

けれども、それは、単なる成長ものがたりにはとどまらない、多くの波瀾を含んで、作品は、意外な展開を見せる。

二、孤立する生

疑念を抱きつつ、母との関係を模索していた鞠子は、自宅の火災により、その母を失う。以来、母親がこのとき故意に自殺したのではな

いか、という思いにとらわれ、母の死の真相を突き止めようとする。それを明らかにすることが、自らの疑念を晴らすことにもつながるのではないかと願って。

作中、鞠子が、大学のある札幌から自宅へ向かう電車の中で、愛読書、『赤毛のアン』の主人公、アン・シャーリーを思う場面がある。「アンは自分の出生に疑問を抱くことなどなかっただろうな」彼女のように、いつそ孤児だったらどうだろう」と考える。「それならば母の不可解な行動や死について悩むこともないし、私が父母に少しも似ていないことを気に病む必要もない」。母を亡くし、母の過去を探ろうとする過程で、鞠子がふと思う、この「孤児」への憧憬は、改めて、鞠子の中の家族像を象徴するものと受けとれよう。孤児であるアンが、自らの寂しさを紛らわすために、常に空想の世界に心を躍らせていたこと、けれども、周囲の人々に対しては、何の疑念も抱くことなしに、まっすぐにその環境を受け止めていたこと、などは、アンにとって、彼女の周囲は最初からつながりの欠落した、まったくの他者であることに対する「事実」がそこには敢然と存在していたからなのに対し、鞠子の場合、その「周囲」が、どこか見せかけにしか過ぎない、虚構のにおいの感じられるものでもあった。そこに、「アン」との心情の対比を用いることで、より鞠子の孤独感を際立たせている。

これも現代を写す一つの特徴でもあるといえるだろう。近年、少子化の影響か、幼いころから、周囲とのかかわりを持つ機会がなく、一人遊びで過ごす子供が多いのが事実である。改めて過去を問えば、昔

は、多くの兄弟姉妹の中での喧騒に満ちた環境に放り込まれ、一人になる時間がなかなか持てなかったため、かえって一人を意識する時間を欲していた傾向が強かったと言えよう。けれども現代では、一人の子であるがために、孤立した時間が増えることで、現実の人間関係の中で生じる葛藤や摩擦を正視できない子供が増えたり、物分り良く、静かではあっても、なんとなく組織的な作業が苦手である子供が増えているようにも思われる。鞠子の孤独感は、たった三人きりの家族の中で、厳格で近寄りがない父親に対し、優しく信頼できる母親により近づこうとしたそのとき、母の中に、自分を避けようとする何かを本能的に感じ取ってしまうことから始まるが、それは、改めて、鞠子自身の家族への憧憬、家族という集団の、より強い渴望とも受けとれる。

又、個人というものにとつて、家族は、社会の中での最小単位の基本集団であるばかりでなく、それぞれの個にとつての歴史的位置時間軸をも定義する。当然のことながら皆誰かの子供であり、親を持つ。そのためそれぞれの「個」は、己が存在する以前の時間を家族の中に見ることができる。そうした時間の流れであるはずの絆を鞠子は、母からの拒絶のまなざしから、極めて薄いものとしか感じられていなかったのだろう。だからこそ、母の面影を自らの中に見出そうと懸命に努力し、自己と母とのつながりを無理にでも引き出そうと試みる。これは、家族というかわりの中で、改めて「個」というものを自覚し、母と言う存在に、自らをもっと認識されたいと願う、強い意識のあらわれであるのかもしれない。集団としての形を問うと同時に、母

子の、深く長い時間的繋がりを探し出そうとしている。鞠子は、自分が自分であることの証として、家族との繋がりにそれを求めた。「自分はこの世に産まれてきてよかったのだろうか」「存在しているよいのだろうか」そうした思春期独特の根源的な悩みを、個として認識するために、彼女の意識はより、「家族」に集中する。

鞠子の家族は、たしかに家族として現実存在しているものである。それがどうして疑えよう。けれども、そこには、何らかの齟齬がある。それが、鞠子の不安であるのだ。

これは、家族形態が単なる「血縁関係に基づく愛情の繋がり」という定義では、くれないほどさまざまな様相を示し、ときには、家族一人一人の心がばらばらに散逸し、外を向いている傾向を示しがちな現代にあつて、改めて、その不安に取り付かれた心が示す家族集団内部へのまなざしでもある。

母が死に、父が一人暮らしを始め、自らは寄宿舎での生活をはじめ、家族が完全に崩壊した後、改めて鞠子の自己の意味を辿る旅が始まる。通常の思春期の若者がたどる、自己中心への心的方向とは逆のルートから、鞠子は家族探しの旅に出た。それは、家族を求め、繋がりを求め、そして、改めて自己を確認しようとする道でもあった。

家族を求め、自己を確認する為に、未知なる謎に挑む。そして、母の死の真相を知るために、鞠子は、父と母の過去を求め、北海道から東京へと向かう。これは、また、もう一人の主人公、双葉の場合も同じであつて、彼女も、突然亡くした母の秘密を探るべく、「母の昔の知

り合い」・藤村という男を頼りに、旭川へ向かう。

北海道に住む鞠子が母の「何か」を探しに東京へ、そして、東京に住む双葉が、北海道へ、とそれぞれ、まったく未知なる土地で、手探りに、それぞれの母の過去を追う。こうした設定にも、家族という繋がりがから放り出された個が、如何にこれからの社会、人生の中で生きていくか、自分なりに答えを見つけ、確立していこうとする姿を象徴しているものとも見る事ができる。家族への視線、自己存在への疑問、そして、自己の模索、それらが、作品の冒頭から、こうしてさりげなくものがたりとして具現化されているのである。

鞠子は何を見つけるか。双葉は何を知るのか。ここから次第に明らかになっていく真実が、ミステリを解く鍵となるのだが、そこに設定されているのは、新たな問題、「クローン」という存在であった。

三 医学への警告

再生医療の存在がわれわれの身近に感じられるようになり始めたのは、一九九七年イギリスで誕生した羊「ドリー」⁽⁸⁾の出現によって、クローンという存在が具体的に報道されはじめてからのことであろう。これにより、両性の関わりなしに、子を生み出すことが理論上可能にされた⁽⁹⁾。そのことから、生命倫理に関わる、科学技術と人とのあり方が、改めて問われはじめている。

母親を失った鞠子と双葉が、それぞれ別のルートをたどりながら、

自己の真実を探る過程の中で、意外な事実が判明する。それは、彼女たちが、「クローン」人間であるという真実であった。これはもちろん、東野作品のミステリー領域における、いわゆる「摩訶不思議」なトリックの一つとして捉えることは可能だが、ここにおいて、現実社会に存在する未知なる部分への視線をも受け止めることができるだろう。

鞠子と双葉は、それぞれが、「良く似た」というより、全くうりふたつの存在であることに気付く。そこで明らかになるのが、「代理母」、しかも、「妊娠できない、あるいは、妊娠するわけには行かない女性」が、他の女性に自分たち夫婦の受精卵を引き受けてもらうという構想」の存在である。それは、彼女らの誕生にまつわる事実であった。作中クローン実験の当事者たる氏家清が、卵子提供者である高城晶子に語る場面が次のように示される。

「君の卵子と体細胞を使いクローンの元になる核移植卵を作り出したところ、無事に分裂成長をはじめた。極めて幸運だったといえるだろう。さっきもいったように、核移植卵が成長するかどうかは、神頼みみたいなところがあつたからね」「われわれはその胚、分裂後の卵を胚と呼ぶのだが、それを君の子宮に着床させた。付け加えていうと、これもまた奇跡的だった。単純な体外受精においても、もつとも難しいのは着床の段階だからだ」。人間のクローンとして、いわば、「生み出された」存在である鞠子と双葉、という二人の人間。こうして、瓜二つの顔をした双葉と鞠子は、自分たちが、それぞれ作為として「作り上げられた」クローンであることを知り、大きなショックを受ける。

クローン人間は、ここで、生み出されていた、これが、この作品の大きな「種明かし」の一つである。

「高城晶子」、二人のクローン移植卵を作り上げる素材を提供することとなったその女性、二人の存在に対して、次のように言う。「あの二人を……私の意思に反して勝手に生み出された二人の分身を何とかしてくれて、そう言ったの。あなたたちが蒔いた種なんだから、あなたたちが刈り取りなさいってね」「世間からどんな目でみられるか」「誰が悪いとか悪くないとか、そう言うことはこの際問題ではないのよ。特に世間の人たちにとっては。クローン計画が明るみに出たとともに、周囲の私を見る眼は変わるわ。分身たちのオリジナルという具合にね。そうして、永久に彼女たちとワンセットに見られ続けるのよ。若くて可能性に満ちた娘たちと、その三十年後のすがた。使用前と使用後」嫌悪しているのは事実ね。この思いはどうしようもない。あの子たちを見たくない。あの子達の存在を認めたくないと言う気持ちに理屈はないわ」「娘のように愛そうとは思わないんですか」「娘のように？とんでもない」高城晶子の声が震えた。「氏家さんからクローン計画のことを聞き、自分の分身が存在すると知ったときの感想を教えてください。一言で言うとうめ味が悪かったわ。それこそ、身の毛がよだつほどね」

鞠子と双葉は、高城晶子の分身だった。「分身」は、その言葉とおり、まさに作り上げられた「存在」。それは、遺伝子を受け継ぐ、「子」ではなく、「同一」の物体なのである。その領域に人間が踏み込んでしまっ

たとき、そこには、人間として当然存在するであろう愛情や心情を一切排除した、まったくの「モノ」としての感情しか存在し得ない可能性があることを、この高城晶子の発言は示している。

確かに、ものがたりはフィクションで、これは、一つの要素に過ぎない。けれども、先にも触れたように、クローン実験について、ドーリーの誕生以来、同じ哺乳類であるヒトへの適用の可能性について、科学は急速に接近をきていていることは事実である。加えて、人間の尊厳等に関わる生命倫理問題が大きく取り上げられるようになり、クローン技術の規制に関する検討¹⁰が、全世界で進められている。そこには、倫理上の問題や、個人の人格の問題等、多くの問題が含まれる。作品がここで描いているものはなにか。それはまず第一に、医学の独善的乱用により、科学技術のプラスとマイナスをこうしてあからさまにすることでの一つの警告と読むことができる。その点については改めて、あの『海と毒薬』（遠藤周作）を振り返ることで、再考することが可能である。

『海と毒薬』は、昭和三十三年、『文学界』に三回にわたって連載され、翌三十三年、文芸春秋新社から単行本として発表された作品である。戦争末期に行われた九州大学医学部の生体解剖実験を取り上げ、そこに立ち会うことになった助手の目を通して、人間の罪と尊良心・尊厳とを追求した内容となっている。この作品については、単行本刊行直後に、山本健吉¹¹が、「人間は神が不在であるかぎり、悪への牽引を、行為において拒みえない」と指摘したことに始まり、佐古純一郎の『海と

『毒薬』で遠藤氏が主題として問うている問題は、どのような悪にかかわろうと、平気でいられる日本人のメンタリテイの不気味さのことである^(二二)、宮内豊の「われわれ日本人における罪の意識の欠如―ひいては罪の意識欠如一般に対する告発こそ、『海と毒薬』の真のモチーフである^(二三)」などの論があるが、確かに、『海と毒薬』には、生体実験に関わる人間たちの、「これをやった後」の生々しい「感動」を期待しながらも「おれたちは心の呵責に悩まされるのやろか」と現実にはただの「無感動」と空虚さしか感じ得ない、「神無き人間の悲惨」が描かれている、と見ることが出来る。これは、キリスト教との関わりから、「神」を通して人間の心の悲惨を捉える、という、遠藤文学を読み解く上での重要な見方であるけれども、たとえば、ここで、その「神」なる視点を一旦離れて考察したとしても、作中、「患者を殺すなんて厳粛なことやないよ。医者の世界は昔からそんなもんや。それで進歩したんやろ。」とさりげなく言い放つ医学生言葉には、特に、医学従事者らの陥りやすい暗い意識があらさまにされていると見ることが出来る。

こうした医学倫理の問題は、早くから、「内科医は病人に対して日々治療実験を行い、外科医は手術を受ける患者に生体解剖を施している^(二四)」という十九世紀のフランスの医学者クロード・ベルナルの言葉が指摘していたように、医学に存在するある種の必要悪とも受け取れる。特に、『分身』で素材化されている「クローン」は、先にも述べたように、体細胞から新しい個体を生み出す、すなわち完全な同一個体の複製であって、それは、単なるクローン技術にとどまらず、臓器移植、

遺伝子治療、延命治療、生殖医療などのさまざまな領域から、今現在においても、生命倫理学、哲学、宗教、文化、法律等の観点から、広く検討が行われている極めて現代的問題である。

作中、ある研究者らの誤った「結果」として産み出されたクローンが、やがて、再び実施されようとする過程が、サスペンスとして描き出されるが、鞠子と双葉がそれぞれに奇妙な男たちに狙われ監禁され拘束される理由が、作品の後半部で明らかになるに至り、そこには、医学や社会とは別の、人間社会に存在する巨大な力が明確になる。白血病を患う権力者が、その治療のため必要とされる骨髄を、自身の細胞を使ってクローンを作り、その骨髄を移植用に使おうとする計画がひそかに行われようとしていた。そのために、鞠子や双葉という、過去の「成果」が、細胞レベルで必要とされていたのだ。すなわち、そのクローン技術を必要としていたのは、単なる医学だけにとどまらない、一つの大きな権力でもあった。如何にもファンタジイ的、娯楽要素として、この構想を捉えることも可能だが、われわれを取り囲む現実社会には、確かに、こうしたごく一部の、医学も倫理をも動かし得る権力の存在さえも潜んでいる^(二五)。科学の進歩が、神の領域をも侵犯してしまう可能性が衝撃的に描き出されているとも言えるだろう。

人体実験が、医学の現場で、「科学の進歩」という理想的美意識によって進められるのは一つの大儀であり、その裏には、大きな別の意味がある。ある特定の個人の、特殊な事情のためには、他者の問題、生命までもを軽視する大きな権力すなわち、巨大なスエゴイズムがそれで

ある。

けれども、問題は、それらを指摘するだけにはとどまらない。クロンは、必ずしも「クローン」として増殖されるだけではない。技術が技術を超えて、生み出してしまうものとは何なのか。それが、このストーリーの中で、現実と、非現実を交錯しながら、改めて読者に示される。

四 パーチャル・リアリティ

さて、こうしてすべてのトリック、疑問が明らかにされたとき、ものがたりの意識は、家族や周囲との関わりの方から、改めて自己の中心へと帰還する。

作品の終わりに、双葉と鞠子は、それぞれが、再生医療によって出現させられた「クローン」であることを知る。しかし、たとえ肉体がクローンとして「再生」されたものであっても、その意識・人格は、誰に支配されることも、左右されることもない、あくまでも個として独立する、一個の人格であることを自覚しつつ動き出す。

鞠子は、母が自分の存在をどこか遠くに見ていたその記憶を改めて呼び起こし、「母がほかの方法じゃなく、何もかも燃やし尽くすという方法で自殺した理由がわかるような気がします。母は全部嘘だと言うことに気付いたんです。幸せな家庭も、やさしい夫も、自分が生んだはずの娘さえ、偽者だってわかったんです。」「ああ、あああ、

かわいそうなお母さん。私の顔をみて、どんなに腹が立ったかしら。どんなに苦しんだかしら」と泣き叫ぶ。何も知らず「作製されて」来てしまった自分の存在に傷つき、そこに、母の苦しみを改めて感じる。鞠子が確認を試みた「家族」には、何の歴史や繋がりはなく、鞠子は、生み出された個、そのものであった。

さらに鞠子は、自らの存在について、次のように語る。「私が母と呼んだ女性とは、単なる分身製造装置にすぎなかった。少なくとも、父は彼女をそのように扱った。多分それと同様に父は私を、かつて愛した女性の複製としてしか見ていなかったのだろう。父にとって私は、それ以上のものでも以下のものでもなかったに違いない」私は自分の中に、父を憎む気持ちが広がっていることを否定できない。自分の欲望のために母の体を利用し、安易に人間の生を操作した罪は重いと思う」と、研究者である父親への非難の気持ちを強める。ここに父娘の感情は、さらに曖昧化する。そもそものはじめから、鞠子にとって、父親の存在は、どこか一線を画する、遠い存在でしかなかった。だからこそ、彼女は、より、近づきたいと願う母親に対する齟齬を、本能的にも強く感じていたのかもしれない。父親との関係がもっと密であったならば、ふとしたことで感じる母の遠い視線など、それほど気にならなかったかもしれない。

「では、父がこの罪を犯さなかったらどうだったかと考えると、私は混乱せずには、いられない。その場合、私はこの世には存在しなかったからだ。存在しなくてもよかったのかと問われると、泣きたくなる

くらい困ってしまう。こんなに苦しまねばならないのなら、生まれてこないほうが良かった、と言う思いは確かにある」自分が分身であることについて、鞠子は「遺伝や細胞の一つひとつが同じであっても、それによって、人格のすべてが決定されるわけではない。現に私が生きてきた人生がこの高城晶子というオリジナルの女性の人生とまったく同じだったなんてことはありえないのだ。これからも違う人生を、違うやりかたですごしていく」との思いに行きつく。復元が可能なのは、単なる細胞であって、そこに内在化する「魂」の部分は決して「分身」などではない。

双葉は、クローンの原型としてその細胞が取り出された、「母体」高城晶子に対して、次のように思う。「この人はあたしだ。あたしはこの人なんだ」「あたしは望んでいたのだ。この人が恐らくあたしの本体であるこの女性が、分身に過ぎない娘を愛してくれることを。」そして、こうも振り返る。「なぜ、高城晶子に愛されたかっただろう」「あたしの母親は、小林志保。あの気が強く無愛想なママしかない。ママがあたしを愛してくれたから、あたしはこの世に存在しているのだ」「もしかするとあたしは、高城晶子から認可してもらいたかったのかもしれない。本人の意思に反して作られた分身が、一人の人間として認められるためには、その本人から愛されるのが一番の早道ではないか」と、自分自身を実体であるものとして容認を願い、その本体からの愛を求めようとする。ここにも、単なる作られた「分身」が、細胞分裂の結果の複製にすぎないのではなく、本体の意識から是認される

ことで、自己存在を明確化しようとする心理が感じられる。

これら、彼女たちの感情は、人間は、クローン技術などによって、その「分身」は作り出すことができるけれども、その意識そのものには、まだ到達できていないという事実を明らかにするものである。卵の分裂操作によって、まったく違う遺伝子を備えて作り出された子供を宿し、出産した母。他者の単なるクローンであるとしりつつ、愛そうと試み、それゆえに苦悩した母。そんな他者である母の姿に、本当の「母」を感じる「産み出された命」。偽りの母、本当の母、そして、命の繋がりが。これらは、従来からある「育ての母」と「産みの母」というものがたりの構図に、かなり進歩的現代的要素を加えたものとも解釈できるけれども、それは、また、モノと命との対比、無味乾燥な科学に、人間の感情を交錯させた、もはや人間には制御しがたい実体への挑戦でもあると捉えられる。したがって、それは、単なる母子の繋がりのものがたりに、現代的謎解きのゲームを加えたミステリとしてのフィクションの領域にとどめることはできない。

医学者にとっては、実験の「結果」にしかすぎない、鞠子や双葉の「クローン」体、けれども、そこに作者は、そのそれぞれに、自己探求をする自由な心と、そして、動きを与えているのである。作中の医学クローン技術は、「命」を作り出せても、その先の「生」そのものは操ることができていない。ここに、科学も技術も、介入することができない、身体とは分離した精神・心、ひいては魂の存在を見ることができる。

科学が可能とする存在「分身」は、生物学的細胞としては作り出せても、心的分身には及ばない。すなわち、解剖してみても身体的にまったく見分けがつかないヒトが二人いたとしても、その二人の脳に記入される経験の内容は異なるのであり、完全に同じ身体が有り得たとしても、その体を持つ人間が同一の経験を持つ同一主体であることは決して有り得ないのである。同一の細胞をもつ「二人」が存在することが分身でも、そこに「二人」いるならば、それらの細胞レベルでは100パーセント同じであつても、もはやそれは違う「別」の「個」の存在なのである。これは、実際は違う「同じ者」が、存在する、ということになる。クローンは、作り上げられた瞬間から、独立する。作り上げられた瞬間から、一人歩きをはじめて、独自の心的活動・身体感覚を持つにいたる。鞠子や双葉の心のゆれ、母への思い、そして、それぞれの母への苦悩からも、改めて彼らが、クローンではあるけれども、「個」としての独立した存在であることが浮かび上がる。

科学は、同じモノを作り出すことができて、同じ魂・生命体を作り出すことはできない。自我はあくまでも個々の自我となり、何物にも左右されない。これこそが、科学が人を支配しきれない、広大な意識の範囲であり、さらには、永遠にそうした介入がなされないでほしいという、現代のわれわれの願いでもある。

分身は細胞を分裂させることにより作り出される。けれども、魂の同一性にまでは、到達することができない。「医学」や「科学」が、人間存在の絶対的な倫理を超えて、その核の部分まで支配しようとも、

まだ、われわれには、その力が介入することのできない、意識の存在がある。それが、大きな論理や、論証としての提示ではなく、こうした小説という架空の空間で、さらに極めて身近で、バーチャルな世界で再認識されようとしていることで、そこに、「個」の心的ありようが改めて提示されているとも言えるだろう。

ここで、改めて、「身体」と「他者」との関係、「身体」と「精神」の関係を根本的に問い直すことができる。造られた身体でも、それが、社会の中で一歩踏み出し始めるとき、それはもう、作り上げられたものではなく、それら自身の世界を構築しようということである。すると、仮想現実の空間、現代に蔓延するバーチャルな世界でも、それが一歩、外的な世界に踏み出すと、現実の中に、また別の擬似・現実空間が登場しかねないということもでき得る。「クローン」が架空であるように、現代におけるコンピューター技術による、バーチャル・リアリティの世界も、確かに仮想空間ではあるのだが、ときに人は、その空間と現実とを錯誤する。すなわち、バーチャルな世界であつても、そこに、いったん、何らかの生きた人間の感情・心的作用が加わるとき、それは、すでに別の心的一個の世界の中では、一つの現実的概念の「空間」として捉えられているということでもある。

たとえば、ネット社会がもたらす、架空の人間が、やがて、他者の中で生き生きと存在することで、そこには、別の「現実」が産まれている。具体的に言えば、現代のわれわれは、ネットワークを利用して、ハンドルネームを持ち、自己の本質的な身体的同一性を隠し、別人格

として、ある世界に参入したりすることが可能なのである。そして、その架空のハンドルネームとしての存在は、他者の中で、極めて安易に、その存在を容認されてしまう。こうなると、現実と仮想との領域が極めてあいまいなものとなり、どこまでが、現実で、どこまでがバーチャルかの認識が不可能ともなってくる。その自己の心的領域に関わる「架空の世界」が、突如として命を帯びて動き出す。

このことについて、更に深く考察・分析できる格好の例がある。唯川恵の、まさに同名の小説『分身』^(二六)がそれだ。詳細については別稿に譲るが、そこには虚構としての世界へと、はじめは興味半分で意図的に介入し、自ら創り出したはずの仮想人物が、やがては、作り手であるはずの自身の意志とは全くかけ離れた、虚像とも実像とも区別しがたい、手の届かない像として、他者意識とともに動き出していく、バーチャルリアリティがありありと描出されているのである。その不可思議な様相によって、作中人物だけでなく、その幻想を享受する読者自身もまた、愕然と倒錯感に苛まれる。

もちろん、鞠子や双葉は、その存在自体が実在する以上、決してバーチャルとは言えない、現実の身体的存在ではあった。けれども、その発生は、ある研究者たちの作爲による、極めて恣意的なものであった。それが、一步踏み出したとき、それは、サンプルとして、クローンとしての「モノ」ではなく、一個の独立した意識として、動き出す。

恣意的に作り出されたものの、が、独立した新たな運命を切り開く。それは、これからの科学がもたらす、バーチャル・リアリティへの、

もう一つの可能性とも受け取れる。

東野の作品はほかに、『宿命』、『変身』など、最先端医学の問題を扱った作品がある。

科学がどれほど、人間社会に介入するか、そして、その介入が、現代人の意識とどのように関わるか、まだまだ発見できることは多い。

おわりに

文学の可能性は無限である。

ミステリの領域でも、ロマンスの領域でも、こうして、さまざまな社会を読み取ることができる。われわれは、こうして現代文学を手にとることで、無意識のうちにも、現代に潜むさまざまな問題に触れることができる。

大衆小説のストーリー性を追うばかりではない、重要な意味を、社会へのまなざしとしてわれわれは読み取ることができる。

こうした発信を如何に受け止めるか、読者としての感性が改めて問われているときであるとも言えるだろう。

注

- 一、『放課後』校内の更衣室で生徒指導の教師が青酸中毒で殺された事件から始まる学園を舞台とした青春推理小説。
- 二、東野は、『幻夜』についてのインタビュの中で「そのときどきの時事問題を取り入れてストーリーに関連づけていくのは好きです。（中略）世の中の出来事の合間をくぐって、ストーリーを作っていく感じ」と発言している。
- 三、このことについて、細谷正充は、「この発言を読めば作者が処女作の位置に安住する気がまったくないことが納得できるだろう。いや、それどころか、ミステリーという枠組みさえ超越しようという決意が表明されているのだ」と述べている。集英社文庫東野圭吾『分身』解説「物語の趣向について」（細谷正充）より。
- 四、森岡清美『家族の変貌と先祖祭祀』（金子書房 一九八九）
- 五、長田雅喜『家族関係の社会心理学』（福村出版 一九八七）
- 六、「家族概念の多様性 家族であることと条件」（鶴川女子短期大学研究紀要二三号）二〇〇一）
- 七、『家族心理学』（東京大学出版会 二〇〇三）
- 八、一九九六年七月、イギリスのロスリン研究所で、雌牛の体細胞を使ったクローン羊「ドリー」が誕生。「ドリー」は、生体の体細胞を用いて生まれた哺乳類ではじめてのクローンであり、細胞を提供した羊とほとんど同一の遺伝子を持っていることから、世界中の注目を集めた。
- 九、クローンとは、「遺伝的に同一である個体や細胞（の集合）」をさし、体細胞クローンは無性生殖により発生する。無性生殖では、同じ遺伝子が受け継がれるため、有性生殖の場合のように偶然的な組み合わせによる多様性はなく、同じ親から再生された個体同士はすべて同じ遺伝子を持つクローンになるという。
- 一〇、・アメリカ「大統領令（一九九七）」人のクローン産生に関する連邦資金支給の当面禁止
・イギリス「人の受精と胚研究に関する法律（一九九〇）」体外受精や、人の胚取り扱いを定めた一般法、人のクローン個体の産生禁止
- ・ドイツ「胚保護法（一九九〇）」人のクローン個体の産生禁止
・フランス「生命倫理法（一九九四）」人の胚を用いた実験禁止
・日本「ライフサイエンスに関する研究開発基本計画（一九九七）」人のクローン個体の作製に関する研究規制
- 一一、山本健吉「小説の中の日本の風土」（『文学界』一九五八年六月）
- 一二、佐古純一郎「解説」（『現代日本キリスト教文学全集5 原罪と救い』教文館 一九七二年）
- 一三、宮内豊「作家と宗教——遠藤周作論」（『文芸』一九七一年一〇月）
- 一四、クロード・ベルナル『実験医学序説』（二八六五）（三浦岱栄訳 岩波文庫 一九七〇）
- 十五、帚木蓬生『エンブリオ』（集英社 二〇〇五年一〇月）には、まさにそうした問題が生々しく提起されている。
- 十六、唯川恵『ため息の時間』（新潮社 二〇〇三年七月）所収。